

中国の大学生が求める日本語教師の行動特性

— 学年による相違 —

小林 明子・顔 幸月・縫部 義憲

Empirical Research on Characteristics of Behaviors of Outstanding

Japanese Language Teachers toward Chinese University Students:

From the Standpoint of the Difference in Grade

Akiko KOBAYSHI, Hsing-yueh YEN, Yoshinori NUIBE

1. 研究目的

2000年3月、文化庁から日本語教員養成のための新しい教育内容が提示された。しかし、この新しい教育内容の適切性を検証するには、まず、日本語教師に求められる「資質」とは何か、という教員養成カリキュラムの基礎となる点について、実証的な研究を積み重ねていくことが必要である(縫部他, 2006)。そこで本研究では、そのための基礎的な研究として、日本語学習者はどのような教師を望ましいと考えているのかを質問紙調査によって探ることを目的とする。また本研究では、日本語教師の資質の中でも、教室内で教師が何をしているか、どのような態度で学習者と接しているかという「行動特性(characteristics of behaviors)」(Moskowitz, 1976)に着目する。調査対象者としては、高等教育機関における日本語学習者人口が世界一であり、約21万人の日本語学習者が存在する中国の学習者(国際交流基金編, 2005)を対象とする。

2. 先行研究

外国語教師の資質についての研究は、1970年代から行われており、学習者が求める良い教師とは何か、どのような特性を備えているかという教師の性格特性についての研究が多く行われてきた。しかし、教師の性格特性は簡単に変えられるものではないため、「良い教師とは何か」という研究よりは、「良い教師は教室でどのように振る舞うか」という研究に重点が置かれるようになった(縫部, 2001)。

学習者が考える「優れた(outstanding)」外国語教師の行動特性に関する調査としてはMoskowitz(1976)がある。Moskowitz(1976)では、「優

た」外国語教師に見られる特徴を外国語教師に対する、インタビューから収集した。その結果から得られた110項目を精査し、36項目に絞った上で、大学生を対象に質問紙調査を行った。各項目について優れた教師とそうでない教師が、どの程度その行動特性を備えているか学習者に評定してもらい、百分率で比較した。その結果、学習者は「優れた」外国語教師の行動特性として、「分かりやすく教える」「多様な教材の提示の仕方を工夫する」「四技能の効果的な指導と評価をする」などの教授法に加えて、「学習者を誉めたり、励ましたりする」「学習者の考えや提案を受入れる柔軟性を持っている」など情意面での配慮も重視していることが示された。

日本語教育の分野では、森川(1993)が国内(広島県内)で日本語を学ぶ就学生・留学生・一般外国人を対象として、「優れた」日本語教師の行動特性に関する調査を行った。Moskowitz(1976)の質問紙を用い、得られたデータに探索的因子分析¹⁾を行った結果、「学習者への配慮」「教えることへの積極性」「教授法に関する知識と実践能力」「日本語以外の背景知識」という4因子が抽出された。この結果から、「優れた」日本語教師の行動特性には、専門知識や教授法の他に、学習者への配慮や積極的な態度が挙げられることが示唆された。また、海外で日本語を学ぶ学習者を対象としたものに、渡部他(2006)や縫部他(2006)がある。渡部他(2006)は、ニュージーランドの高校生280名と大学生222名を対象として、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方を質問紙調査によって検討した。探索的因子分析の結果、高校生も大学生も「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示唆され、その構造は「授業の実践能力」「専門的知識と教養」「教室の雰囲気作り」「学習者への配慮と教

職意識」「指導経験と資格」「日本語力と文化的知識」の6因子から構成されていた。また、学習年数の長さによって学習者を3グループに分け、共分散構造分析による分析を行った結果、学習年数によって学習者が教師に求めるものが異なることが示された。学習年数とともに(1)上昇して安定した傾向を示すもの(「教室の雰囲気作り」「日本語力と文化的知識」)、(2)上昇して下降するもの(「授業の実践能力」)、(3)下降してゆくもの(「専門的知識と教養」「学習者への配慮と教職意識」「指導経験と資格」)に分けられた。縫部他(2006)は、渡部他(2006)の研究を踏まえ、海外の日本語学習者が持つ教師像を幅広く把握するため、6つの国と地域(ニュージーランド、タイ、韓国、中国、ベトナム、台湾)、18大学1441名の日本語学習者を対象に質問紙調査を行った。探索的因子分析の結果、どの対象国においても「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示され、その構造は「日本語教師の専門性」「指導経験と資格」「教師の人間性」「コース運営」「授業の実践能力」の5因子から成り立っていた。また、共分散構造分析を用いて対象国による相違を検討した結果、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が対象国によって異なることが示された。この研究では(1)「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が国によって異なることが明らかにされたが、各国の特徴について詳細な分析ができなかったこと、(2)因子分析の方法について、より信頼性の高いモデルを提案するには分析方法を精査する必要があること、が課題として残された。

以上の研究を踏まえ、本研究では、海外で日本語を学ぶ学習者が多く存在する中国に焦点を当て、新たな統計手法を用いて、中国の日本語学習者が求める「優れた」日本語教師の行動特性を実証的に明らかにすることを試みる。また、学習者の属性によって考え方が異なる可能性があるという渡部他(2006)の示唆から、本研究では、属性の一つとして学年による相違についても検討する。

3. 調査概要

3.1. 調査目的

調査目的は、中国の大学で学ぶ日本語学習者が求める「優れた」日本語教師の行動特性を実証的に明らかにすることである。さらに、学年によって考え

方に相違が見られるかどうかとも検討する。

3.2. 調査対象者

中国の4大学に在籍する学習者308名に調査の協力を得た。未記入が含まれた回答紙は分析から除外した。また、学年以外の属性がデータに及ぼす影響をできるだけ少なくするため、日本語専攻ではない学習者、日本語学習歴が4年以上の学習者、日本滞在歴がある学習者を除外した。その結果、1年生48名、2年生99名、3年生67名、4年生39名、合計253名が分析対象となった。

3.3. 調査方法

調査は質問紙を用いて行った。各大学の日本語担当教師に郵送で調査を委託し、集団形式で質問紙に回答を求めた。調査期間は2004年11月から2005年3月であった。質問紙は、Moskowitz(1976)で作成された36項目を参考にした。本調査では、さらに日本語教育にふさわしい項目の追加や、日本語教育に合致しないと考えられた項目の削除を行い、41項目から成る日本語版の質問紙を作成した。なお、中国語版の翻訳にあたっては、日本語から中国語に翻訳し、再度それを日本語に翻訳するバックトランスレーションをそれぞれ行い翻訳の適確性を確かめた。調査対象者は、各項目について「優れた」日本語教師が備えているべきだと思うかどうかを、4件法(1=全く当てはまらない~4=非常に当てはまる)で評価した。さらに、フェイスシートに、性別、母語、日本語学習年数、日本語学習意欲、渡日経験の有無と滞在期間等の記入を求めた。

3.4. 分析方法

まず Stepwise Variable Selection in Exploratory Factor Analysis (SEFA; Kano and Harada, 2000)による探索的因子分析を行い、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念を検討した。従来の探索的因子分析では、因子負荷量の大きさや経験則によって変数を選択していた。それに対して、SEFAは因子モデルにおいて不適切な項目を統計的に同定する分析方法であり、Web上で用いることができる。SEFAを用いることにより、統計的により妥当な項目の選択が可能となる(Kano and Harada, 2000)。次に、SEFAで得られたモデルを検証するため、統計解析ソフト SPSS for Windows 10と Amos 5を用いて検証的因子分析²⁾を行った。最後に、「優れた」

日本語教師の行動特性に対する考え方が、学年によって異なるかどうかを検討するために、共分散構造分析を用いた多母集団の同時分析³⁾を行った。

4. 結果

4.1. 「優れた」日本語教師の行動特性

「優れた」日本語教師の行動特性がどのような構成概念を有しているかを調べるために、調査対象者全員のデータにSEFAを行った。因子の抽出に最尤法・プロマックス回転を指定し、縫部他(2006)を参考に2因子から6因子までのモデルを検討した。その結果15項目が残り、解釈可能な4因子が抽出された。4因子モデルの適合度は、 $\chi^2(51) = 42.40$, CFI⁴⁾ = 1.00, RMSEA⁵⁾ = .00であった。モデルの適合度とは、尺度の妥当性を示す指標の一つで、いくつかの適合度指標を総合的に検討して、データをうまく表しているかを判断するものである。本研究では、 χ^2 値(Nが少ない時は $p > .05$), CFI(.90

以上なら適合度は良好), RMSEA(.08以下ならモデル受容, .05以下なら適合度は良好)という適合度指標を用いた。SEFAによる探索的因子分析の結果、全ての指標が基準値を上回っており、モデルの適合度が良好であることが示された。SEFAの因子負荷量を表1に示す。さらに、SEFAで得られた因子構造を検証するために、共分散構造分析による検証的因子分析を行った結果、4因子モデルの適合度は、 $\chi^2(84) = 124.37$, CFI = .96, RMSEA = .043となり、やはりモデルの適合度が良好であることが示された。SEFAと検証的因子分析から得られた4因子は以下のように命名した。第1因子は、「修士号(又はそれ以上の学位)を持っている」[指導経験が長い]など、教師の指導経験、資格に関する項目で構成されていたため、「I 指導経験と資格」と命名した。第2因子は、「教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする」[授業を面白く、楽しくする]など、楽しく和やかな授業雰囲気を醸成する行動であったため、「II 教室の雰囲気作り」と命名した。第3因

表1 SEFAの結果

質問項目 / 因子	因子負荷量			
第1因子：指導経験と資格				
Q1 修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。	.72	.04	-.10	-.06
Q2 指導経験が長い。	.68	.08	-.01	.05
Q3 日本語教育に関する資格を持っている。	.65	.06	.07	-.03
Q4 教室内において学習者に規律を守らせる。	.58	-.07	.07	-.05
第2因子：教室の雰囲気作り				
Q5 教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする。	.06	.78	-.09	.09
Q6 学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。	.01	.66	.07	-.10
Q7 授業を面白く、楽しくする。	-.03	.51	.17	.10
第3因子：授業の実践能力				
Q8 学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。	-.08	.06	.76	-.16
Q9 学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる。	.08	.12	.52	.08
Q10 勤勉である。	.29	-.03	.49	.05
Q11 学習者からの提案や考えを取り上げる。	-.02	.23	.46	.07
Q12 言語学の基礎的な知識がある。	.29	-.17	.34	.14
第4因子：学習者との関わり方				
Q13 日本語以外のことについても相談にのってくれる。	.00	.03	-.10	.83
Q14 暖かく、やさしく、思いやりがある。	-.06	.10	.31	.41
Q15 必要なら教科書に出ていないことも教える。	-.06	.29	.08	.29

子は、[学習者が分からないとき、分かりやすく説明する][学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる]など、実際に授業を行う能力に関する項目で構成されていたため、「Ⅲ授業の実践能力」と命名した。第4因子は、[日本語以外のことについても相談のってくれる][暖かく、やさしく、思いやりがある]など、学習者との相互作用で求められる行動、態度であったため、「Ⅳ学習者との関わり方」と命名した。

以上により、学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性は(1)有資格者で教職歴を積んでいること、(2)楽しく、和やかな教室雰囲気の醸成が上手であること、(3)授業の実践能力が高いこと、(4)学習者の状況に合わせて配慮できること、となった。

4.2. 学年による相違

次に、学年によって、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念にどのような違いがあるか分析した。調査対象者を1・2年生のグループ(147名)と、3・4年生のグループ(106名)に分け、これらの2グループを比較するため、共分散構造分析を用いた多母集団の同時分析を行った。その結果を表2に示す。表2の8つのモデルのうち、よりデータに適合している(AIC⁶⁾の値が最も低い)モデル4を採用して、解釈した。このモデル4は、因子構造、因子間の相関係数、各因子の分散が等値で、各因子の平均のみが異なっていることを示している。つまり、学年によって「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念に違いは無く、得られた4つの因子に対する考え方に、ばらつきが無いことが分かった。次に、表3にモデル4の各因子の平均、各因子の分散を示す。なお、表3は因子間の数

値を比較するものではなく、各因子における学年の得点を比較するものである。比較のため、1・2年生のグループの因子平均を0に固定し、3・4年生のグループとの相違を検討した。また、因子平均については、視覚的により分かりやすくするため図1にまとめた。表3と図1の因子平均を見ると、「Ⅰ指導経験と資格」「Ⅱ教室の雰囲気作り」「Ⅲ授業の実践能力」について、3・4年生よりも1・2年生に重視される傾向が見られた。一方、「Ⅳ学習者との関わり方」は他の因子と異なり、1・2年生よりも3・4年生に重視されることが示された。

5. 考察

「優れた」日本語教師とはどのような教師かについて、先行研究では様々な議論・調査がなされてきたが、本調査の結果、中国の大学生の視点から、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する4つの枠組み、「指導経験と資格」「教室の雰囲気作り」「授業の実践能力」「学習者との関わり方」が示された。つまり学習者は、資格や指導経験、教室経営、授業方法に加えて、教室外でも学習者との円滑な人間関係を構築する能力を持った教師を求めていることが示唆された。学年に関わらず、この4つの枠組みは共通していたため、これらは今回の調査対象者に共通して求められている「優れた」日本語教師の具体的な行動特性であるといえる。また、学年によって日本語教師に求める行動特性が異なることが示された。1・2年生では、3・4年生と比べ、「指導経験と資格」「教室の雰囲気作り」「授業の実践能力」という行動特性が求められていると考えられる。一方、「学習者との関わり方」に関しては、1・2年生と比べ、3・4年生の方が重視する傾向が示

表2 多母集団の同時分析における適合度指標の比較

	χ^2	<i>df.</i>	CFI	RMSEA	AIC
モデル0：配置不変+強測定不変	253.158	200	0.949	0.033	393.158
モデル1：モデル0+共変動が等値	264.125	206	0.944	0.034	392.125
モデル2：モデル0+因子分散が等値	261.290	204	0.945	0.033	393.290
モデル3：モデル0+因子平均が等値	265.946	204	0.940	0.035	397.946
モデル4：モデル1+モデル2	267.284	210	0.945	0.033	387.284
モデル5：モデル1+モデル3	277.407	210	0.935	0.036	397.407
モデル6：モデル2+モデル3	274.421	208	0.936	0.036	398.421
モデル7：モデル1+モデル2+モデル3	280.610	214	0.936	0.035	392.610

表3 多母集団の同時分析の結果(因子平均/因子分散)

学 年	1・2年生	3・4年生
I 指導経験と資格	0 / 1	-0.27 / 1
II 教室の雰囲気作り	0 / 1	-0.15 / 1
III 授業の実践能力	0 / 1	-0.33 / 1
IV 学習者との関わり方	0 / 1	0.18 / 1

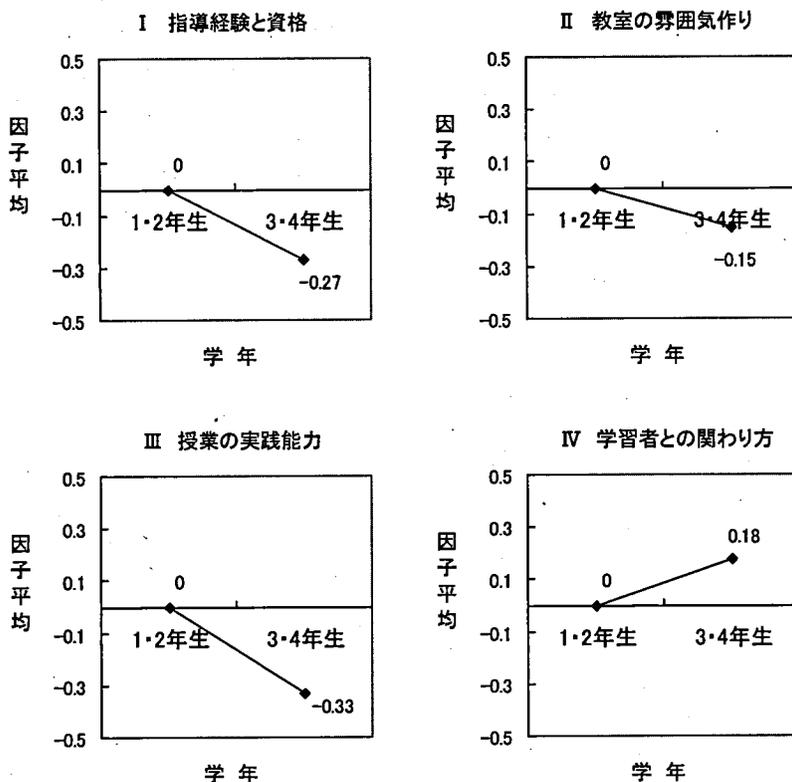


図1 学年による因子平均の違い

された。この結果から、学年が上がるにつれて、「優れた」日本語教師のイメージは変わってゆることが考えられる。1・2年生という学習の初期段階においては、3・4年生と比較して、指導経験や資格など教師の背景や実際の授業方法に関連する行動特性を重視していることが示された。一方、学習が進んだ3・4年生では、1・2年生と比べて、授業外でも学習者の相談に乗るなどの暖かい人間関係を構築する能力を求めていることが示唆された。

今後は、他の国の学習者が求める「優れた」日本語教師の行動特性についても調査・分析を進める予定である。また、日本語教師自身が持つ教師像(八木, 2004)についても調査を行い、学習者と教師の間で考え方に相違があるのかどうか比較・検討すること

が必要である。このような基礎的な調査を積み上げることによって、学習者の視点を取り入れた日本語教師養成カリキュラム作成のための一助となると考えられる。

注

- 1) 探索的因子分析とは、質問項目(観測変数)から観測変数間の相関を説明する因子構造を探索的に解明するものである。
- 2) 検証的因子分析(確認的因子分析)とは、観測変数間の相関がある因子構造で説明できるという仮説を検証するものであり、事前にパス図や相関関係を描くことが可能である。一般的には、探索

の因子分析は検証的因子分析の前段階として用いられることが多く、また探索的因子分析の結果は検証的因子分析によって検証されることにより、より適切な結論に至ることができる(山本・小野, 1999)。

- 3) 多母集団の同時分析とは、異なる母集団(グループ)の違いを統計的に検討できる分析方法である。まず、制約の少ないモデルから多いモデルまで、複数のモデルをあらかじめ作成する(表2のモデル0~モデル7)。これらのモデルのうち、データへ適合度が最も高いと判断されるモデルを採択し、両グループの相違を解釈することができる。
- 4) CFI(比較適合度指標: comparative fit index)は、0~1までの範囲をとり、完全にデータに適合しているモデルは値が1になる。
- 5) RMSEA(平均二乗誤差平方根: root mean square error of approximation)の値が0.1以上のモデルは当てはまりが悪いと解釈できる。
- 6) AIC(赤池情報量基準: Akaike's information criterion)は、複数のモデルを比較して最良のモデルを選択するときに使用する指標で、値が小さいモデルほど優れていると判断される。

参考文献

- 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2003年』凡人社。
- 繁樹算男・柳井晴夫・森敏昭編著(1999)『Q & Aで知る統計データ解析 DOs and DON'Ts』サイエンス社。
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫(1992)『原因を探る統計学 共分散構造分析入門』講談社。
- 豊田秀樹編(2003)『共分散構造分析[疑問編]』朝倉書店。
- 縫部義憲(2001)『日本語教師のための外国語教育学』風間書房。
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月(2006)「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究 平成16年度~平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』(課題番号16320068, 研究代表者・中川良雄), pp.94-105。
- 森川千里(1993)『「良い日本語教師」の特性に関する研究』1993年度広島大学卒業論文。
- 八木公子(2004)「現職日本語教師の言語教育観—よい日本語教師像の分析をもとに—」『日本語教育論集』20号, pp.50-58。
- 山本嘉一郎・小野寺孝義編著(1999)『Amosによる共分散構造分析と解析事例』ナカニシヤ出版。
- 渡部倫子・佐藤礼子・狩野不二夫・縫部義憲(2006)「日本語学習者が求める日本語教師の行動特性—ニュージーランドの高校生と大学生を対象として—」『日本教科教育学会』第29巻, 第1号, 日本教科教育学会, pp.59-68。
- Kano, Y. and Harada, A. 2000 Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika* Vol.65, No.1, pp.7-22.
- Moskowitz, G. 1976 Competency-based teacher education before we proceed. *Modern Language Journal* Vol.60, pp.18-23.
- 付記 本調査は平成16年度~17年度科学研究費補助金基盤研究(B)「日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究」(研究代表: 中川良雄, 課題番号: 16320068)の一環として行われたものである。